

2007年2月12日

社会資本整備審議会河川分科会  
河川整備基本方針検討小委員会 委員長 近藤 徹 様  
委員 各位

子守唄の里・五木を育む清流川辺川を守る県民の会  
(川辺川ダム反対 52 住民団体代表連絡先)

「球磨川水系河川整備基本方針の策定」に関する意見書（その10）  
(穴あきダム問題について)

(1) 前回の委員会で委員長が穴あきダムの検討を指示した理由—川辺川ダムの環境への影響

前回の検討小委員会で近藤委員長は、「川辺川ダムを穴あきダムにした場合を検討し、その結果を次回の委員会で示すこと」を事務局に指示した。翌日、国交省は記者会見で穴あきダムの検討をしないことを表明したが、ここで問題とすべきことは、委員会でなぜ穴あきダムのことが急に浮上してきたかである。それは川辺川ダムを建設した場合の環境への影響を委員会としても懸念せざるをえなかったに他ならない。後で述べるように、穴あきダムは決して「環境にやさしいダム」ではないが、それはさておき、環境への影響を心配せざるをえなくなったのは、近藤委員長がいみじくも語った「(濁水対策としての)清流バイパスや(下流への土砂供給対策としての)排砂バイパスといっても、胸にすっと入ってこない。」という発言に端的に表されている。他の複数の委員からも、「川辺川ダムの環境への影響」を心配する趣旨の発言があった。川辺川ダムで水をためることによる影響を憂慮せざるをえないからこそ、水をためない穴あきダムの話が浮上してきたのである。

それならば、委員会として、川辺川ダムの環境への影響は回避できるとする国交省の説明を受け入れることなく、その説明に対する疑問を明確に示すべきである。委員会がそのことをあいまいにして、川辺川ダム建設に道を開くようなまとめをするようなことは委員会としての責任放棄であり、決して許されることではない。近藤委員長も「清流バイパスや排砂バイパスといっても、胸にすっと入ってこない。」と考えるならば、その疑問を具体的に語るべきである。それを語らずに穴あきダムも検討したというポーズを示すことで環境問題への配慮をアピールしようとするのはあまりにも無責任である。委員会は、川辺川ダムの環境への影響に関する国交省の説明に対し、その疑問を明確に示す責任がある。

(2) 穴あきダム案を安易に考える委員会の非専門性

上記のとおり、前回の委員会で川辺川ダムを穴あきダムにする案が浮上した。しかし、それは逆に、委員会の非専門性を露呈することになった。それは、川辺川ダム計画を多少なり知っていれば、かんがい用水の利水目的がなくなったからといって、川辺川ダムを穴あきダムに変えることは容易ではないからである。

### ① 国の治水計画の破綻

従来の川辺川ダムの治水計画はその良し悪しは別として、なべ底調節という洪水調節方式をとっている。それは、人吉地点の洪水流量が大きくなったときは川辺川ダムの放流量を極端に小さくして人吉地点の洪水流量の上昇を抑えるという操作方法である。このなべ底調節によって国の球磨川の治水計画が成り立っている。しかし、なべ底調節は川辺川ダムの放流ゲートを人為的に操作することによって可能となるものであって、自然調節方式の穴あきダムでこのような操作はできない。自然調節方式は、人吉地点の流量の状況とは関係なしに、川辺川ダムへの流入量が大きくなれば、それに対応してダム放流量が大きくなるから、国交省による計算上の人吉地点のピーク流量がかなり増えてしまうことになり、国の球磨川の治水計画が根本から成り立たなくなる。

〔注〕ただし、本来の穴あきダムではなく、ゲート操作を行う穴あきダムというものである。そのことについて付言しておく。それは国が九頭竜川水系に計画中の足羽川ダムである。足羽川ダムは総貯水容量が2,870万m<sup>3</sup>で、詳細はまだ検討中であるが、洪水吐ゲートと排砂ゲートを設けることになっている。排砂ゲートは洪水吐ゲートより何メートルか下にある。平水時は二つのゲートが開けておき、大きな洪水がきたら、洪水吐ゲートの調節と排砂ゲートの開け閉めを行うことによって、なべ底調節方式の洪水調節と、宇奈月ダムのような堆砂排出を行うことが考えられているが、思惑どおりに機能するかどうかはまったく定かでない。このように本来の穴あきダムではないが、穴あきダムと称しているものもある。

### ② 不特定利水容量の問題

穴あきダムは、かんがい用水の開発目的がなくなりそうだとすることで出てきた話であるが、この開発目的がなくなっても、川辺川ダムの利水容量がゼロになるわけではない。川辺川ダム計画では既得のかんがい用水を補給するための不特定利水容量の分が確保されている。これは渇水時の流量補強に使うという名目のもので、その容量分の費用は治水と同様に国と県が負担することになっている。その容量は時期によって異なるが、非洪水期（11/16～6/10）は1,150万m<sup>3</sup>もある。実際には長年の間、既得のかんがい用水は特段の支障なく、取水し続けてきたのであるから、このような不特定利水の補給は不要であるが、国の机上の利水計画はそのことを前提としているから、計画上はなくすことができないものである。

### ③ 発電の問題

川辺川ダム計画にある発電は、水没でなくなる発電所の発電量と相殺されてしまう程度で、意味のないものであるが、電源開発(株)が参画するというので、発電用の容量が

川辺川ダム計画に確保され、国交省と電源開発㈱との間で契約が成立している。国交省の都合でこの発電容量を一方向的にゼロにすることは契約上、簡単なことではない。

#### ④ アーチ式コンクリートダムの問題

川辺川ダムはダムコンクリートの堤体積を著しく小さくするアーチ式コンクリートダムで計画されている。これは、貯水池の水圧の大部分を川の両岸に逃がす方式であるが、一方、穴あきダムは、貯水池の水圧をダム本体の重量で受ける重力コンクリート式ダムで計画されているものである。仮に、川辺川ダムを穴あきダムで計画するとすれば、穴の強度を保つためにコンクリート量を増やさざるを得ず、重力式コンクリート式ダムに変わる可能性が高く、川辺川ダムの計画を根本から作り直すことが必要となる。もちろん、有害無益な川辺川ダムをつくる必要性がないことは言うまでもない。

### (3) 環境にやさしくない穴あきダム

ダムは水を貯めることによって、環境に対して様々な影響を与えるが、穴あきダムは常時、水を貯めないなので、環境にやさしいという話が流布している。しかし、穴あきダムであっても環境への影響は決して小さなものでない。

#### ① 実例が乏しい穴あきダム

穴あきダムといっても、まだ本格的な実例は島根県の益田川ダムだけである。それも、このダムができてからまだ1年程度で、大きな出水を経験しておらず、特に問題となる土砂堆積の問題をクリアできるという保証はまったくない。しかも、益田川ダムの洪水調節容量650万m<sup>3</sup>に対して川辺川ダムは洪水調節容量が8,400万m<sup>3</sup>、益田川ダムの13倍もある。そのように10倍以上の規模を持つ川辺川ダムを穴あきダムにした場合、どのような事態になるかは予見できないところが多い。

#### ② ダムの存在自体が周辺の景観を破壊する。

島根県の益田川ダムの現地をみれば分かるように、常時は貯水していないとはいえ、川のだ真ん中に高さ46m、幅140mのコンクリート躯体があって、川を遮っているのは異様な光景である。川辺川ダムの場合、現計画では高さ108m、幅300mの大きさであるから、景観を圧する程度は益田川ダムの比ではない。それは景観への影響にとどまらず、そこに生息する様々な動物の生活空間を遮って、それらの生息に少なからぬ影響を与えるに違いない。

#### ③ 洪水時の貯水が自然環境に与える影響

穴あきダムでは洪水時には水をため、広大な貯水域がつくられる。貯留された水は徐々に穴から排出されていくが、ある程度の期間は貯水域がつくられ、その貯水域に生息する動物に大きな影響を与えることは必至である。さらに、貯水域に生育する植物に対しても一時的に水面下になることはそれなりの打撃を与え、ストレスに弱い絶滅危惧植物が外来植物に変わってしまうことも予想される。貯水域の動植物の生息生育状況に影響

を与えないはずがない。

#### ④ 土砂流出が計画どおり進まず、堆砂が進行する可能性が大きい

島根県の益田川ダムは穴あきダムにすることによって堆砂問題を解消できるとして、洪水の初めと終わりの方で土砂を流出させる計画になっている。しかし、それはあくまで机上の話であって、そのように土砂が流出するかどうか、まったく定かではない。益田川ダムはまだ出水を経験していないから、土砂がどのように挙動することになるのか、これから判明することである。まして、川辺川ダムの場合は年間平均の土砂流入量は27万m<sup>3</sup>（東京ドームの容積の1/5）もあるから、穴あきダムの土砂流出機能（どの程度あるのか疑問だが）によって対応できるようボリュームではない。川辺川ダムを穴あきダムに変えてもやはり堆砂が凄まじい勢いで進行することが十分に予想される。そして、堆積した土砂が穴あきダムの穴をいずれは塞いでしまうことも考えられる。

#### ⑤ 流木や岩石、土砂で穴が詰まってしまう可能性もある

洪水時には土砂だけではなく、大きな流木、岩石も流下する。それらが折り重なって流下した場合は穴あきダムの穴をふさいでしまうことも予想される。ゲート操作のダムならば、ゲート操作で放流口を大きくしたりして閉塞を防止する措置をとることが可能であろうが、穴あきダムの場合は成り行きにまかせるしかなく、大きな流木、岩石などで閉塞してしまう可能性がある。その場合は洪水が放流されず、貯水位がどんどん上がって、最悪の場合は貯留された水がダムから越流して、決壊の危険性を作り出すことにもなりかねない。

#### ⑤ 濁水の流出源になる可能性もある

2004年と2005年の夏の豪雨により、川辺川源流域で大規模な山腹崩壊が起きた。崩壊した土砂は巨大砂防ダムである樅木（もみのき）砂防ダムと朴木（ほうのき）砂防ダムなどに堆積し、そこからシルトが徐々に流出し、清流川辺川が一転して濁水の川に変わってしまった。濁水の期間は半年以上続いた。この樅木ダムや朴木ダムの状況は穴あきダムの未来の姿を暗示している。④で述べたように穴あきダムで土砂の堆積が進行すれば、そこから堆積土砂からシルトが徐々に流出することが十分に予想される。